

研究ノート

## 教師の専門性に関する一考察

—教師いじめ, 教育リスク, 学校のマクドナルド化—

### A Study on the Professionalism of Teachers:

Teachers as Targets of Bullying, Education Risks and The McDonaldization of School

秋山 茂幸

Shigeyuki AKIYAMA

Key words : ケア, 学校の市民社会化, チーム学校, 教育のサブプリメント化, アカウンタビリティ

#### 1. はじめに

小論では, 筆者が担当している「教育学概論」の授業に参加してくれた学生の意見を手掛かりとしながら, 教師という仕事が現在おかれている状況について, 若干の考察を展開したい。まずは, 現代の教師が晒されているリスクについて, 「教師いじめ」と「教師がケアを職業としていることの問題性」という二つの象徴的な視点から検討する。そして, こういったリスクをヘッジ(回避)するために, 近年, 学校を市民社会化し教師の仕事を分業せよ(チーム学校)という提唱が行われていることを確認する。その上で, リスク・ヘッジやアカウンタビリティを重視するこれらの主張が(意図せずとも)教育の新自由主義化, 学校のマクドナルド化を促進する可能性があることを指摘する。さらに, ここからが本論の眼目となるが, これらの新自由主義化・マクドナルド化を, 現場の教師自身が下支えしていること, システム適応的な振る舞いをするを欲望するように環境から水路づけられていることを, 具体的な事例を参照しながら示したい。

そして最初に, 本稿に横たわる個人的な問題関心のありかをあらかじめ述べておきたい。小論は, 筆者自身が教育における新自由主義的な動きに疑問と違和感を持ちながらも, それを絶対悪として批判するに終始することにも同時に違和感を持つ——新自由主義的・マクドナルド的な社会に居心地の良さを感じる自分が存在する——という, ダブルバインド的状况にあることが執筆の動機

となっている。

#### 2. 教師いじめ

「私の出身の高校では, 先生が授業をしながら板書をしていると, 書いている文字を横からすぐに黒板消しで消していくような『やんちゃな人』がいました」

「教育学概論」の授業中の一コマ。いじめ問題を取り上げ, 学生の体験談に耳を傾けていると, 実に様々な話と出会うことになる。そのなかでも近年, 特に目立って耳に入るようになってきたのが, 実は「教師いじめ」である。授業中に消しゴムやゴミなどを投げ続けられた教師の話, 何人もの男子生徒に繰り返し(性的な侮辱などを含む)ひどい暴言を吐かれた女性教師の話, 教室から締め出されその場で座り込んで泣くしかなかった新任教師の話, などなど直接・間接に様々な事例を耳にする。もちろん, 気の弱い先生が生徒からいじめられたという話は昔から耳にするが, 近年その頻度が例外とは言い難いほどになってきているように感じる。2017年度前期の授業の中でも, 150名程度の受講生の中で, 教師いじめの目撃談・体験談を10名程度の参加者から聞くことになった。ひどいものでは, いじめにより, 髪が抜け, 最終的にはうつなどの精神疾患になり退職に追い込まれていった教師の話をしてくれた学生もいた。

この「教師いじめ」というものは, 事柄の本性上, 問題が表面化し難いところがある。そもそも, 生徒間のい

いじめ問題でさえ、「いじめられた側は、いじめられていることを認めたがらず、いじめられているという申告を親や教師にはしたがない場合がある」ということは、しばしば指摘されている。そこには、親に心配をかけたくないという思いはもちろん、「いじめられている自分という存在を自分自身で認めたくない」というギリギリのプライドや自尊感情の問題がある。これは、教師であれば、なおさらであろう。「大人（教師）である自分が子ども（生徒）からいじめられている」などということは、自分自身で認めたくもなければ、他者に援助を求めて声を出すのも難しい。「自分は生徒から楽しく『いじめられている』に過ぎない」という自己認識のもと、実態としてはいじめられている教師もいるだろう。特に、近年の教員評価などの成果主義的な流れの中で、教師のチームワークが崩れ、教師一人一人が個人として分断させられているような状況になれば、自分の「弱み」を同僚の教師に相談し、共有するという事は難しくなる。「指導力とは、一人ひとりの教師という個に内在する能力であり、問題の解決は何であれ自己責任である」という風潮の下では、教師にとって「いじめられている自分」を他者に表出することは困難を極める。そういったことから、問題をギリギリまで一人で抱え込み、最終的には精神疾患そして休職などに追い込まれている教師は、表面化している部分を越えて、かなりの数にのぼるのではないだろうか。

いじめ問題に関して授業で取り上げるとき、学生からは必ず「スクールカースト」がキーワードとして挙がってくるが、このカーストの上位集団には、生徒だけではなく教師も逆らえないことがある。クラスを上手に運営していく上でこの上位集団に、媚びるような教師の話も耳にする。生徒間のいじめが発生したとき、事なかれ主義で傍観者となる教師、囁き立てる観衆の側に回ってしまう教師、さらには加害者の一員になってしまう教師、こういった問題教師は、「葬式ごっこ」の悲劇の時代から、東日本大震災で自主避難してきた生徒に「菌」をつけて呼ぶような現在まで、繰り返し出現してきた。ここには、教室内で権威を失い、カーストの上位層が醸成する教室内の空気に対抗できず、ただの「大きな生徒」になってしまった教師の姿がある。そこからさらに進んで、現在の教師は「いじめの四層構造」（森田洋司）の中心に位置する被害者の場所にまで連れてこられることとなった。教師いじめの問題は、生徒と教師の関係が逆転し、「小さな生徒」のように扱われかねない現在の教師のリスクを象徴している。

### 3. 引き裂かれた存在としての教師

「でも、教師だって職業なのに素でいいんですか？」

ふたたび、「教育学概論」の授業中の一コマ。学期の最初や最後などの節目に「あなたがこれまで出会った印象的な教師と、あなたの理想の教師像を教えてください」と学生に聞くことにしている。印象的な教師には、多くの学生が部活の顧問の先生を恩師として挙げ、「自分もそのような教師になりたいと教職科目を履修している」と話してくれる。具体的に、どのような先生だったのかと聞くと、学生の話の中に頻りに登場するキーワードがある。それは、「信頼できる」、「愛情をもって」、「親身になって」といった「人間的な」言葉である。問題教師がメディアを賑やかし世間から叩かれる一方で、多くの現場の先生方が、一人ひとりの生徒に親身に向きあい、多忙を極めるなかでも自分の時間を削って、人として様々な助言や励ましを与え、人格全体で生徒と向き合いながら、その成長のために力を尽くしている。古い学園ドラマで見たような「無名のブチ金八先生」が、いまだに日本には無数にあり日本の学校教育を支えている。こういった、生徒の成長に関わる喜びこそを「やりがい」とし、日々の教育活動のエンジンとしている教師の話聞くにつけ、いつも頭が深く下がる思いがする。

そんな「人間として正面からぶつかっていくブチ金八先生」に関する様々な学生の報告を、嬉しくなって表情を緩めながら聞いていたある年の授業で、一人の学生が、ふと口にした疑問が今も忘れられない。それが、「でも、教師だって職業なのに素でいいんですか？」という言葉だった。それは、教師という仕事に内在する根源的な問題が、剥き身のまま突如として姿を現したようで、その言葉に私（我々）は面食らい、束の間、静寂が教室を包み込んだ。

ところで、近年の学生の多くは学費や生活費のためにアルバイトをしている。ファミリーレストランやコンビニ、ファーストフード店、チェーンの居酒屋、衣料品店などの産業では、すでに学生が基幹的な労働力となっている。そういったなか、近年ではブラックバイトなど大きな社会問題として取り沙汰されている。これは就職活動に関しても同様で、いかにしてブラック企業を避けるか、ということが学生の最も大きな関心事の一つである。そして、教師という職業は現在、その多忙さ、精神疾患の患者数の高止まりという状況のなかで、「ブラックである」という認識が広がりつつある。教職科目を履

修する学生には、親が教師であるという人も多いが、最近では「教師になることを親に反対された」という話もしばしば耳にする。

「でも、教師だって職業なのに素でいいんですか？」という言葉は、仕事とプライベートを明確に分けることなく、素の部分を仕事に投入することが（無言の圧力であれ）強要されるような環境は、その仕事をブラック化させる危険が高いのではないかとこの警戒感から発せられている。さらに敷衍すると、教師という仕事が本質的に有する「不確実性」そして「無境界性」（佐藤学）に対する警告と言ってもよい。その点は、親の子育てという営みと教師の仕事との類似性を考えるとわかりやすい。どちらも、何時間も何年も同じ空間の中で同じ人間関係が続けながら、共に生活しなければならない。それらの営みは、その場において大人が何らかの働きかけを行うことで子どもが「人間として成長すること」が期待されている。そして、その働きかけが「成功したかどうか」は、数年後、数十年後にならないとわからず、目に見える形としてはなかなか出てこない。したがって、「この働きかけの対価として、この金額を支払うことが相応である」という等価交換の原理で、それらの営みが行われているわけではない。さらに、人間の成長に関する営みは、「ここまでやったら完成」というゴールがない。このような点から、まじめな親や教師ほど「やるべきこと」が無際限に増えてしまう。学校時代に、教師のことを間違えて「お父さん」とか「お母さん」と呼びかけてしまったという笑話はいしばしば耳にする。現在まで日本の教師は、「親代わり」のような「素の親密な関係」に入るという極めて特異な営みこそを仕事の一環としてきた。

この問題性を解き分けるため、ここでは特に、「ケアを職業とすること」という観点から、哲学者の鷲田清一が、その矛盾を極めて上手に表現しているので引用しておきたい。「ケアは、看護とか介護といった職務（＝役割）においてではなく、職務を超えてだれかあるひとりの人間として現れることなしには職務そのものが遂行できないという矛盾を抱え込んだいとなみなのである。いうまでもないが、同じことは教育の場面にもみられることである」。ケアの仕事とは、「職業人になりきったら職業をまっとうできないという矛盾、顔をもったひとりの人間として他の人に接する職業という、そういう深い矛盾をはらんだ仕事である。他人の世話をするという仕事上でのしんどさをそのまま個人生活に持ち越さずにはいない仕事である。『燃えつき』はそういう場所で起こ

る」[鷲田 1999: 208, 213]。

固有名と匿名のあいだ、二人称的な関係と三人称的な関係のあいだで引き裂かれる仕事、それが教師の仕事なのだろう。これまで教師は、「引き裂かれた人間」としてこの二重性・矛盾を抱えながらも、それを支える社会的コンテクストの存在によって、この二重性を生きることこそを、生きがい・誇りとして仕事をすることができた。しかし、近年、教師をとりまく社会的コンテクストの変容によって、この二重性は誇りではなく、「リステク」として教師自身に感知されるようになってきた。

#### 4. 学校の市民社会化、教師の仕事の分業

多くの論者が指摘していることだが、近年の教育を動かしているのは、新自由主義の政策とイデオロギーであり、これは教師の仕事に教育市場における「サービス」へと変貌させた[佐藤 2016][鈴木 2016]。政策に関する考察はここでは繰り返さない。ここで焦点を当てたいのは、教師自身が、新自由主義を草の根で下支えせざるを得ないという点、換言すれば教師がシステム適応的に振る舞うことを欲望するように水路づけられているというミクロレベルにおける力学の問題である。

教育社会学者の内田良は、著書『教育という病 子どもと先生を苦しめる「教育リスク」』のなかで、学校には様々な「教育リスク」が存在し、子どもが組体操事故や体罰、柔道事故といったリスクに晒されていると同時に、教師にも二つのリスクが襲いかかっていると述べている。一つ目の「訴訟リスク」とは、何らかの事故などが起こったときに教師の責任が問われ裁判で訴えられるかもしれないというリスク<sup>1)</sup>。二つ目の「自己犠牲リスク」とは、本小論でも述べてきたような、教師が自分自身のQOLが損なわれるまで教育活動を強いられ、生徒から暴力を受けても「教育的配慮」という美名のもとに問題が公にならず耐えることを強いられるようなリスクである[内田 2015]。内田は、学校において「教育＝善きもの」という美名のもとに、様々なリスクが隠蔽されていることに繰り返し警鐘を鳴らしている。そして、この学校的な価値観は、学校内部だけではなく、学校外部の市民社会の側にも広がり、学校に蔓延する病的な側面を外部の市民こそが下支えしていると指摘している（熱血系の体罰教師を支持する保護者や地域住民など）。よって、すべきは「市民社会の論理」から外れて治外法権化している学校内部と、それを支える学校化してしまった市民を「市民社会化」すること、ということになるであろう。このとき批判すべき敵として設定され

るのは、聖職としての「ブチ金八先生」的な教師のあり方である。市民社会的な法の論理を度外視して、村落共同体的・家族主義的な学校空間において「親代わりの教師」のあり方を追求することこそが、教師の仕事のブラック化、リスクの増大化の本源的な元凶だと考えられている。

以上のような「学校のムラ社会的な価値観を市民社会化せよ」といったようなメッセージは、多くの教育研究者が発している。例えば、いじめ論で著名な社会学者の内田朝雄は、暴力系のいじめへの対処法として、学校内治外法権を排し通常の市民社会の大人と同じ基準で警察や法の手ゆだねること、コミュニケーション操作系のいじめに対しては、学級制度を廃止すること、さらには部活動も廃止し地域の市民クラブなどに機能を移管することなどを提唱している〔内藤 2012〕。学校のムラ社会的な価値観によって、様々なリスクに苦しめられてきた子ども、保護者、教師にとって、これは極めて説得的な議論である。特に、教師に関してあらためて言えば、残業代も出ないのに過労死ラインを超えるような形で働かされている問題<sup>2)</sup>、部活動の顧問が強制されボランティアのような形で土日も駆り出される問題、子どもの貧困など教育だけでは解決できない社会の様々な問題のしわ寄せが学校に集中し「尻拭い」を押しつけられている問題、などなど近年、様々な教師の負担・リスクに光が当てられ、労働環境を改善する動きが、今ようやく始まりつつある。それは、まさに学校に市民社会の論理を導入することであり、教師の仕事を様々な専門家と分業し(チーム学校)、これまで学校に押し付けられてきたことを外注(アウトソーシング)し、学校の役割をダウンサイズすることである。

## 5. チーム学校とマクドナルド化

こういった動きには、間違いなく歓迎すべき点が多々ある反面、一部の教育関係者からの批判も散見される。例えば、教育評論家の尾木直樹は、いじめ問題について語るなかで、スクールカウンセラーという専門家を配置し、教師の仕事を分業することの問題として次のように述べている。「スクールカウンセラーが配置されていることで、教師が、生徒の心理的・精神的な問題について、あまり目を向けなくなってしまうという問題が生じています。いじめや不登校などの問題が起きると、すぐに「心の専門家」とされるスクールカウンセラーに問題の解決をすべて丸投げするということがもめずらしくありません。こうした状況では、教師が子どもたちの心のみつ

け、理解する力量はますます低下していかざるを得ません」〔尾木 2013: 82f〕。尾木は、もちろんスクールカウンセラーそれ自体を不要と言っているわけではない。しかし、仕事を分業することが、教師の多忙といった「自己犠牲リスク」に関するリスク・ヘッジの役割を果たす反面、教師の指導力の低下や、子ども理解に関するアンテナの鈍化につながる危険を指摘している。敷衍して、教師にとって「困った子ども」、「厄介な子ども」、「面倒な子ども」を排除し、向き合うことから逃げる口実として専門家の存在が求められていると言ったら意地が悪すぎるだろうか。専門家の存在が、教師と生徒のあいだで好ましいつながりを持つことを阻害する可能性があると考えるのは杞憂だろうか。

さらにもう一人。元中学校教員の赤田圭亮は、日本の教員は文化として幅広い守備範囲を持つことを、これまで継承してきたが、チーム学校によってその空洞化が進行すると批判し、次のように述べている。「『チーム学校』論は、学校の現場実態を勘案せず、機能的な面を求めるあまり、養育・教育の場としての連続性、反復性、集団性、全体性を捨象し、教員や子どもを一つの歯車のように見立て、効率性を追い求めているのではない。具体策を検討するにつけ、そこから見えてくる学校は、教職員の一人ひとりの「顔」の見えない、のっぺりとした効率優先の工場のようなものである」〔赤田 2016: 108〕。

尾木や赤田が指摘しているのは、分業化によって学校教育が縦割り化し、自分の専門の仕事以外のことについては無感覚、無関心、無責任になり、全体としての仕事の質については気を使わなくなる危険である。リスク・ヘッジという名目のもとに、スクール・カウンセラー、スクール・ソーシャルワーカー、スクール・ポリス、部活の外部指導員、保護者との交渉を行う法律の専門家などなど、今後、専門家は学校につぎつぎと投入されていくだろう。すると、心の問題はこの専門家、貧困などの家庭環境の問題はこの専門家、生活指導や学校の秩序維持はこの専門家、クレーム親の対応はこの専門家・・・などなどと、子どもへの視線が断片化し、子どもを特定の側面で切り分けながら分解して対応することが常態化し始める。その帰結として、全体としての(存在まるごととしての)子どもと向き合う人間が誰もいない、という悲劇が起こる可能性がある。喩えて言うなら、子どもにサプリメントを与える人は無数にいても、食事そのものを誰も提供しないような状況である<sup>3)</sup>。赤田は、これを学校の工場化と述べているが、同じような事態は、社

会全体の問題として既にジョージ・リッツァによって「マクドナルド化する社会」のなかで描かれている。ここではリッツァの議論を小論文の文脈を意識しながら、簡単におさらいしておきたい [ジョージ・リッツァ 1999]。

リッツァは、マクドナルドが成功した理由は、以下の四つの魅力的な次元を持っているからだと言う。すなわち、マクドナルドは消費者、従業員、経営者に、効率性、計算可能性、予測可能性、制御の四つを与えている。まず第一に効率性とは、特定の目的を達成するのに最短距離を提供するということである。そこでは、空腹から満腹へ最短距離で効率的に辿りつくことが何より優先される。したがって、長い年月のスパんで考えたとき商品が体の健康にとって良いものなのか否かは二の次となる。第二に計算可能性とは、量と時間に関していわゆるコスト・パフォーマンスが計算可能だということである。どういった質のものにどれだけ投資し、それによってどれだけリターンを得ることができるか計算した上で、消費者が他の商品やサービスと比較しながら選択することが可能となる。学校においてもこういった基準の中で、すべての活動が可視的なエビデンス重視の世界に還元されることになるだろう。近年、教育の世界においては「アカウントビリティ（説明責任）」という概念が浸透しているが、それは、納税者の税金に見合った (accountable) サービスになっているかどうかをチェックするという意味が背景に存在する。佐藤学は、教師と親が共に子どもを育て合う責任としての「応答責任 (responsibility)」から区別して、新自由主義の政策によって遂行される教育改革を「アカウントビリティ政策」と呼んでいる [佐藤 2015: 53]。第三に予測可能性とは、商品とサービス（従業員の振る舞い）がどこでも均一であり、メニューを見れば事前の期待通りの商品とサービスを受け取ることが可能となることである。学校は、スタンダード化が進行し（きまり・規準の浸透）、まるで分刻みでスケジュールが計画された旅行会社のパッケージ・ツアーのように予測（シラバス）通りの体験ができるサービス提供の場となるだろう。第四に制御とは、従業員がマニュアル通りに正確に限定された業務のみをこなすようにコントロールされることである。上述した効率性、計算可能性、予測可能性を最大限に高めるためには、指定された仕事以外は、やる必要もなければ、やるべきでもない。他人の業務に口や手を出すことは害にしかならない。さらに、客の側の振る舞いも店側の想定範囲内に収まるようにコントロールされる。注文の仕方、注文できるメニューの選択の幅、購入時の振

る舞いの作法などがマニュアル化され、それを身につけた者だけが客となる資格を得る。以上の制御により、利潤を最大限あげるようにシステムが設計されている。

人々が、顔と固有の名を持った人間全体として接触・交流するような本源的な意味での市場（イチバ）そして地域の相互扶助的な生活共同体が、グローバル化した新自由主義的世界のなかで空洞化し、それらを代補し埋め合わせるものとして上述したようなマクドナルド的なシステムが現出している。

## 6. マクドナルド化への欲望と対抗

この学校のマクドナルド化という現象を土俵の外から批判しても、現場の教師を追い詰めてしまうことになりかねない。まずは、なぜ学校のマクドナルド化が歓迎されるのか、あらためて見ておきたい。

教育科学研究会編集『教育』2016年6月号（かもがわ出版）では、「学校スタンダード」に関する特集を組んでおり、ここで様々な教師によって報告されている現在の学校の姿は、マクドナルド化した学校そのものである。「〇〇スタンダード」というマニュアルが浸透した学校では、教科書、ノート、筆箱を机のどの位置に置かが細かく正確に決められ、挨拶や挙手・発言するときの仕草や言葉遣いが画一的にルール化され、給食指導や掃除の仕方が統一され、学力向上のためにもっとも効率的な（最短距離の）過去問対策やドリル的な授業が繰り返される。これらは、外から一瞥すると息苦しさを感じざるを得ないような世界であり、多くの論者が批判的に、こういった現状を報告しているが、見逃してはならないのは、特に若い教師はスタンダードを歓迎しているという記述が見られる点である。例えば、北川保行は、次のように言う。「【規程】があることで、【授業が成立している】【助かっている】という若い教員も多くいる。事細かに決められた授業スタンダードや【規程】の【別室指導】のうえに【授業成立の保険】をかけているのだ」 [北川 2016: 53]。スタンダードやマニュアルを批判するのは容易いが、教師の同僚性が崩壊し何事も自己責任が問われるような学校現場に放り込まれた若手教員にとっては、リスクだらけの学校空間のなか、徒手空拳ではやっていけないというのが本音だろう。冒頭にあげた「教師いじめ」に苦しむような教師からすれば、学校全体でスタンダードを定め「授業成立の保険」をかけてくれれば、これほど有難いことはないだろう。

同じく、小学校の特別支援学級に勤める折口大は、現在まで特別支援学級は、基礎的な条件整備をないがしろ

にされたまま、現場に努力を強いる形で進められてきており、その歪みが、そこかしこに現れているとしながら、次のように指摘している。「現場では、日々をどう乗り切るか、効率よく“まわす”かが目先の課題となり、「しまった流れ」「気持ちを高ぶらせない授業」、そして「させるための技術の習得」に向かって、実践が変質しています。毎日、毎時間、同じ板書、同じ台詞、きまったスケジュール。どの教師も、同じ調子で、同じ授業をしています」[折口 2016: 10f]。

以上のように、様々な社会的・制度的条件のなかで、「環境管理型権力」(東浩紀)のようなものが働き、教師そして子どもに、「こう振る舞うしかないのだ」「リスクを負わないためには、こう振る舞った方が合理的だ」と考えさせるようになる。さらに言えば、マクドナルド化の「制御」の次元にあったように、自分と同じように、アカウントビリティを重視しながら効率的・合理的に振る舞おうとしない同僚のことを、学校のリスクを増大させ、仕事の効率を低下させる職場の邪魔なノイズだと捉えるような感性が、一人ひとりの教師の中に育っていく。

このような時代に、「プチ金八先生」であることは、本人の心の内部や周囲との関係の中で、様々な葛藤や摩擦を発生させるだろう。しかし、そう指摘した後で、直ちに付け加えなくてはならない。それでも、教師という仕事はある種の公共的な使命感や、人間的なやりがい、仕事への誇りが——現時点では、既にかすかな残余のようなものだったとしても——存在するからこそ魅力的な仕事なのであり、現在においても「プチ金八先生」でありたい教師、あろうとする教師志望の学生も、たくさんいるのだと。例えば、部活動の顧問という労働形態に対する改革や外部指導員の導入という動きに対して、その利点を認めつつも「やりがい」を奪われるようで一抔の寂しさを感じている教師がいる。そして部活動の顧問になることにこそ魅力を感じ、教師を目指している学生も相当な数にのぼるだろう。さらに、教師の多忙を承知のうえで、「プチ金八先生」よろしく、問題を抱えた生徒と人として正面からぶつかって深い関係を築き、無事卒業できるように、子どもたちの人間的な支えになりたいと考えている教師、そして教師志望の学生も、たくさん存在する<sup>4)</sup>。

そのうえで、さらに話をもう一度、裏返そう。未来予測的に言うのなら、教育のマクドナルド化は不可逆的な過程であり、後戻りすることなく進行を続けるだろう。なぜなら、「プチ金八先生」は、マクドナルド化する学校の中で植民地化され、(やりがい)搾取の底なし沼に

嵌り込む可能性が高いからだ。というのも、本来、断片化された視線の中で子どもに対処する専門家の分業体制では、全体としての(存在まるごととしての)子どもは捉えることができない。それは、水を網で掬うような作業であり、専門家の網の目から零れ落ちるモノが必ず発生する。全体としての(存在まるごととしての)子どもと向き合おうとする現場の教師は、その零れ落ちるモノに気づき対処しようとするが、周囲の同僚がリスクを避けて手助けしようとしなければ、その負荷がすべて一人の教師の肩にかかるような厳しい事態に追い込まれることになる。これは負の循環を形成し(なぜ自分だけがリスクをとらねばならないのか)、結果としてマクドナルド化は加速度的に進行せざるを得ない。このことを、多くの教師は(無意識的にも)感受しているので、先述した内田良や内藤朝雄の提唱する、学校の市民社会化、分業化、ダウンサイズ化の加速度的な徹底を歓迎する。

このような学校の市民社会化、分業化、ダウンサイズ化は、現在、教師の多忙やリスクを解決するためという「善意」のもとに提唱され進められているが、結果として、これらの主張は、意図はせずとも、新自由主義的な「教育=サービス」論と共振し、学校のマクドナルド化を促進させる<sup>5)</sup>。これらの主張が(多くの教員にとって)説得的なのは、マクドナルド化したシステム社会では、その社会を生きるプレーヤーは、みなシステムの歯車として振る舞った方が合理的であり、楽であるという当たり前の事実と話が重なるからである。教育を消費する保護者や子どもが「お客さま」、すなわちサービスを楽しむ側として教師の目の前に立ち現れるとき、「それでも私は名前を持った人間として真正面から子どもと向き合いたい」と考えることは、様々な負担やリスクを教師に発生させる。村の小さなレストランで毎日同じ常連客を相手にしていた給仕が、都会のマクドナルドで、同じように接客できるだろうか。小さな離島で患者と家族のような関係を築いてきた医者が、都会の大学病院で同じように患者と家族のように接することができるだろうか。

新自由主義的な教育の流れに対する批判的な言説が、このミクロな人間関係に作用している力学と、教師個人にのしかかる負担やリスクの問題を看過し、教師に「それでもシステムに抵抗しろ」という要求となって突きつけられてはならないだろう。もしくは、それらの批判的言説が「プチ金八先生」の良心の呵責を増大させ、システムに搾取され押しつぶされるような人間を生み出すことに寄与してしまってはならない。

## 7. おわりに

リッツァも指摘しているように、既に高等教育においてもマクドナルド化は加速度的に進行している。そういったなか、本小論では、結論めいた言葉を最後に指し示すということができない。なぜなら、私自身が、まさにこの状況を上手に（システム適応的に）生きられず、他方で、その「不適応の自分」を自己肯定することもできない人間の一人だからである。すなわち、マクドナルド化する社会への欲望と対抗という真逆のベクトルが重なり合う二重性を生きるなかで、ダブルバインド的な状況に陥っている。ただ、私は「教育学概論」の授業を担当するうえで、このように「私自身が宙吊りにされ戸惑っている」という一人称的な語りをこそ出発点とし学生と共有していきたい、ということだけは蛇足ながら記しておこうと思う。

### 注

- 1) 「「保険」で自己防衛する教師のSOS」（『週刊朝日』2012年11月23日号）では、保護者などからの訴訟を想定し、弁護士費用や敗訴した場合の損害賠償金などを補填する「損害保険」が教職員の間で注目されている事実が紹介されている。
- 2) 「過重な業務 教員悲鳴 中学の6割「過労死ライン超え」」（『朝日新聞』2017年4月29日）。
- 3) 油布佐和子と錦織俊介は、教師と心理臨床家の視点の相違と協働の可能性について考察しながら、心理臨床家の導入の危険性については、「強い薬が病巣には効力を持ったが、病人の体力を一層低下した」というたとえを想起させると述べている。[油布・俊介 2012: 121]
- 4) 『毎日新聞』（2017年6月14-30日）の「ドキュメント 高校教師という仕事」という特集で紹介された都立高で女子ソフトボール部の顧問を務める八木雄一郎先生の言葉が印象深い。やや長くなるが記事を引用したい。「八木先生は国が進めようとしている部活指導員の導入に対し、複雑な思いを抱えている。日々の指導や引率を任せられれば、多少負担は減るだろう。学外の人に生徒をゆだねる不安はあるが、それで助かる先生もいるだろう。しかし——。部活に教育効果があることは否定しがたい。定時制時代を思えば、ドロップアウト寸前だった「アイツ」も部活にだけは来てくれた。【八木のクソ野郎】と突っかかってきた【あのボウズ】も今では立派な社会人だ。【俺、子ども生まれたよ】なんて知らせが、たまらなくうれしかったりもする。【部活の目標は勝つこと。

それは間違いない。でも目的は社会に出る前に失敗や苦い体験をしておくことだと思うんですよ。』（中略）部活改革の流れからは『時代遅れ』とされるかもしれない。それでも八木先生は言う。「目の前に部活をやりたい生徒がいる。僕としては、ただ、それに応えただけなんです」（2017年6月29日）。「土日も部活。休めぬまま、また週が始まる。心割られたまま、終わらぬ日常を繰り返す。それでも、なぜ働いているのと問われれば、月並みだけれど、言うだろう。【やりがいです】って。教師という仕事には年に何度か、他の仕事では味わえない甘美な瞬間が訪れるという。【やっと分かった。先生。ありがと】。授業中のそんな不意の一言。【先生、俺ね】と荒れた青春が心の内を見せてくれた時。それに、強豪校にあと一步に迫った時のチームの一体感。先生たちは口をそろえる。そんな瞬間がやりがいなのだ。だから、働くのだと。でも、そこに危うさはないですか。労働時間に歯止めの利かない現状では、やりがいを求めるほどに命が削られる危うさが」（2017年6月30日）。

- 5) 教師の多忙を解決する方策として、教職員の定数を削減する一方で外部専門家による分業体制を充実させることを強く提唱しているのは、文部科学省ではなく、コスト削減・財政健全化を重視する財務省であることは注意されてよい（『教員定数にらみ合い』『毎日新聞』2015年12月10日）。

### 引用・参考文献

- 森田洋司 2010『いじめとは何か——教室の問題、社会の問題』中公新書
- 内藤朝雄 2012「法の介入、学級制度廃止でいじめの蔓延を食い止める」（『中央公論』2012年10月号）
- 鷲田清一 1999『「聴く」こと力——臨床哲学試論』TBSブリタニカ
- 内田良 2015『教育という病 子どもと先生を苦しめる「教育リスク」』光文社新書
- 尾木直樹 2013『いじめ問題をどう克服するか』岩波新書
- 油布佐和子・錦織俊介 2012「教師と外部専門家との協働に関する一考察—学級担任と外部専門家の「子どもを見立てる視点」の相違から—」『早稲田大学大学院教職研究科紀要』第4号
- 赤田圭亮 2016「工場化する学校「チーム学校」の問題点から考える」（『現代思想』vol.44-9, 2016年4月, 青土社）
- 赤田圭亮 2017「「チーム学校論」が「チーム」を解体する」（『現代思想』vol.45-7, 2017年4月号, 青土社）
- 佐藤学 2015『専門家として教師を育てる——教師教育改革

のグランドデザイン」岩波書店

佐藤学 2016「教育改革の中の教師」(『岩波講座 教育 改革への展望4 学びの専門家としての教師』岩波書店)

ジョージ・リッツァ 1999「マクドナルド化する社会」正岡寛司訳, 早稲田大学出版部

北川保行 2016「『生徒指導規程』の徹底がもたらした現実」(教育科学研究会編集『教育』2016年6月号, かもがわ出版)

折口大 2016「効率優先で変質していく教室」(教育科学研究会編集『教育』2016年6月号, かもがわ出版)

鈴木大裕 2016「崩壊するアメリカの公教育——日本への警告」岩波書店

東浩紀・大澤真幸 2003「自由を考える——9・11以降の現代思想」NHKブックス